7 合目にて思うこと

京都大学大学院工学研究科教授 大江 浩一
Kouichi Ohe

人生において三つ目の元号(令和)が始まろうとしている。昭和を 28 年、平成を全部生きた。学生時代に有機合成の魅力にとりつかれ、今もその魅力を若い世代に伝えたい一心で研究を続けている。昨今、大学では運営費交付金等の削減により基盤研究の矮小化が進み、博士後期課程進学率の低下しかり、on the research training のあるべき姿が歪められているように感じる。

講談寛永三馬術「愛宕山梅花の誉」の嘶は研究に通じるところがあり、興味深いので紹介したい。家光公が芝愛宕山(東京都)の下で、130 段の石段を馬で駆け登り、紅白の梅花一枝ずつを手折ってくるよう二人の旗本に命じる。しかし、落死の危険を感じた二人は腹痛(仮病)を理由に、その場をかわしてしまう。他の者は皆怖気づき、名乗り出る者も無いので、馬術の達人の中からくじ引きで 3 人が選ばれる。各々達人が駿馬で石段を登るが、いずれも馬が 7 合目でピタリと止まり動かず、鞭を入れるが、馬が棹立ち、石段から転落、人馬ともに絶命する。皆困り果てている時、間垣平九郎が、足に怪我した瘦馬とともに勇敢に名乗り出た。彼は石段下で馬に一発奮起を繰返し耳元で語りかけ、鬼門 7 合目では馬の耳の汗を丁寧に拭い、馬の目を左右交互に手で塞ぎ、石段をジグザグに登り切ったのである。そして彼は、無事二本の梅花を家光に届けることができた。つまり、平九郎は 7 合目で、馬の疲労と、左右に見える断崖絶壁の恐怖心を取り除いたのである。また、ジグザグ登りにより、馬に 10 合目の目標だけをとらえさせた。平九郎が馬に乗るのではなく、うまく馬をのせたという嘶であるが、問題解決法が抜群に面白い。馬と人間の見事なコラボレーションである。

愛宕山(924 m, 京都市)で思い出すことがある。研究室を任された時、毎年学生と登山することに決めた。目標は標高 1000 m そこそこの山なので、遊山である。見通しの良い山頂には大抵三角点なるものが埋設されており、そこで研究室の仲間と写真を撮るのがいつもの楽しみである。数年前、研究室 3 度目の愛宕山登山で、三角点に向かっていった時、分岐で数名の学生に追いついた。どうやらどっちへ行くか思案していたようだ。道標はあ

るが、三角点の方角は書いていない、しかも一つの道は下っている。自ら、「こっちだ」と言いながら、道中一緒に来た学生と道を下るが、他は誰もついて来ない。少し進んだ頃、「間違っていないですか。そっちは下の村へ行く道ですよ」と分岐で止まっている学生の声が聞こえた。手招きして声をかけたが、彼らは別の方向へと行ってしまった。その後我々は、下って、再び現れた急な山道を登り、無事三角点に辿り着いた。この時、「薄情(?)」の二文字が頭をよぎるが、不確実なことはまず回避する傾向の今時の学生(集団心理も関係)の行動パターンであると思い直し、動機付けと信頼関係の構築に新たな配慮が必要であると感じた。

三角点は、三角測量の際の経度・緯度・標高の基準点であり、頂部に十字の切り込みが入った柱石が埋設されている。日本列島には、11 万近くの三角点があり、5 万分の 1 地形図を整備するため、明治時代から測量官の地道な努力により設置されている。GPS が無い時代の苦労の跡である。歴史に残る三角点設置の記録が、明治 40 年 7 月に未踏とされた霊峰剣岳(2999 m)に登頂した柴崎芳太郎測量官と地元案内人宇治長次郎ら測量隊の偉業として、新田次郎著「剣岳一点の記」に記されている。命懸けの任務を与えられた測量官と山岳の気象や地形を熟知した案内人との厚い信頼関係が、二人の自然への畏敬の念とプライドとともに描かれている。この実話は、成功には、綿密な計画が必要なことは言うまでもなく、強靱な肉体と精神力、そして豊富な経験から生まれる冷静な判断力とチームワークが重要であることを改めて教えてくれる。

全合成研究は勿論、研究は、目標設定、工程選び、工程管理、判断、ナビゲーション、リスクマネジメントにおいて、しばしば登山とダブらせて語られることが多い。7 合目は、目標が間近に見えるところだけに、冷静な判断力と実力が試される。しかし、事を始めるにはまず、なぜ、何の為に行うかを我々は真の拠り所とすべきである。勇気と希望を持って、自分の目指す方向へ真っ直ぐに足を踏み出そう、そこに、安全な平地があろうがなかろうが。

(平成 31 年 4 月 29 日受理)